
～ カミサマ物語 ～

ムジコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カミサマ物語

【Nコード】

N6868Z

【作者名】

ムジコ

【あらすじ】

新連載 作者の都合 打ち切りにならないように頑張ります。

最強物、ハーレム、理不尽な進行など、その他諸々含みますがそれでも構わん。という器が銀河系より大きい人はぜひ。

第1話 神様って幼女か爺のどっちかだと思ってたよ(前書き)

がんばるぞー

第1話 神様って幼女が爺のどっちかだと思ってたよ

部屋がある。

只々白くドアが1つだけある部屋が。

部屋、と言ってもその広さは計り知れない。

部屋とはもう言えないかもしれない。

だがそこは部屋なのだ。

生物の気配はしない。音も響かず、変化もない。

只白く、広い部屋。

ガチャリ、という音を響かせながら誰かが部屋に入ってくる。

性別を記すならば女性、それもとびっきりの美女だ。どこか神々しささえ感じられる。

「やはりいないか……」

女性は何かを探すようにしてそう呟く。

「あいつが現れた気配はした、もう空間を何百と回った。だがなぜ見つからない、私がこんな失敗をするなど……」

気のせいだったか、と言いながらその部屋を出ようとしたが。

ドサリ、という音が、何か落ちたような音が響く。

物体の正体は人。青年であった。

女性はニヤリ、というような擬音がつきそつなほど笑みを浮かべる。

「やっと来たか、世界に爪弾きにされた者よ」

まるで新しい玩具を買い与えられた子供のように笑う女性。

青年はなぜこの白い部屋に現れたのであろうか。

……

……

……

…

それはある朝のことだった。

その青年はいつものように家を出て、いつものように学校へ向かおうとした。

「行ってきます」

いつものように形だけの挨拶。だが、それは彼に返ってくるわけもなく、ただ虚空に響くだけだった。

「今日の夕飯はどうすっかなあ…、材料はあるにはあるがいかんせんレパートリーがなあ…」

彼がこのように主婦的な考えをしているには理由がある。

彼の母親は彼が生まれたときにすぐに死去。

彼の父親は不幸な事故にあい死亡した。

彼が8才のときであった。

親戚に引き取られたがその親戚もあまり家に帰ってこないため必然的に彼は家事スキルを磨くことになった

実質1人暮らし同然だったので当然のことであろう。家計簿をつけるのも彼である。

まあそんなことは置いておこう。

「っ!?!…なんだ? いったい…、胸が…苦しい…」

しばらく歩くと彼は急に胸の苦しみに襲われた。

「これはまさかっ…恋?」

何に對してだろうか……

「いやいやぶざけてる場合じゃねえよ。まじで苦しいんですけど、

もうギリギリなんですけど、色んな意味で」

今彼の周りには人はいない。助けを求めようにも意味がない。

「あー…くそっ、なんなんだよ…、あれ…？目の前が…く…ら…
く…」

その瞬間彼は意識を失い、その場に倒れた。

…

…

…

…

「…うん？ここは…どこだ…？」

彼が目覚めたのは白い部屋、何も無い白い部屋だった。

「やっと来たか、世界に爪弾きにされた者よ」

彼の側には女性がいた。

「…なるほど、夢か。夢ならいいや、もう一度寝てしまおう。きつと起きたら近所の幼馴染みの女の子が起こしに来てくれて嬉し恥ずかしハプニングが発生し互いにドキドキしつつ、意識してしまうというイベントが起こるに違いない」

さあ寝るぞー、と彼は言いつつモソモソと丸まろうとした。

ちなみに彼に幼馴染みの女の子などいない。

「…こら、現実逃避をするな、起きろ」

彼の側にいる女性は彼をゲシゲシと蹴りながら起きるよう催促する。

「あー…痛みも感じるなんてリアルな夢だなあ」

「いい加減起きんか!!」

遂に怒りの沸点を越えたのか女性は彼の腹に踵を落とす。

「おふうっ!!」

鳩尾に入ったのが盛大に吹き出し、彼はまた気絶した。

……

……

……

…

「で？ここはどこなんだ？夢じゃないってのはわかったし、俺はさつきまで道を歩いていたはずなんだが…」

意識を取り戻した彼は現状を把握したのか女性に訪ねる。

「ふむ、もう少し取り乱すと思ったのだが…よく落ち着いていられるな？」

「まあ理不尽な目に合うのは慣れてるといっつか慣れてしまったといっつか…」

「ふむ…トラックに轢かれかけたり放火されたりピンポイント落雷が起きたりか？」

「おー…特に落雷がやばかった。ほぼ俺の目の前に落ちたからな、ゴム性の長靴だったから無事だったけどな…」

「……お前は「何で知ってるんだ!？」とか言わないのだな。過去を知る他人がいたら普通は驚くと思うのだが…」

「うん? いやー…何かね、あんたなら知ってると思っただよ。…何でだろう?。」

確かに落ち着き過ぎだと思っ。

「ククツ…まあいい、ここがどこか、だったな。まあ名前は決まってるない。只の『部屋』だ」

「ふくん、部屋ねえ…んじゃあもう2つ質問だ。……あんた誰? 何で俺はここに居る。」

青年は混乱こそしてないもののいきなり知らない場所にいるという不安を感じていた。

「まあアレだ、私は俗に言う神様、っていうやつだ」

「ふむ、まあそうだろうとは思っていたけど」

「つまらん奴だな…もう少し驚いてくれてもいいと思うのだが…、まあいい…お前がここにいる理由だったな、それは私が最初に言った通りお前が世界に爪弾きにされたからだ」

「はあ？」

「いや、分かりやすく説明するとだな、まずお前がいた世界の最大容量が1テラバイトだとする」

「ふむふむ」

「お前がいた世界の人間はそれこそ1人の容量はヘクトにも満たない、有能な指導者などがようやく1キロを超えるかどうかだったんだ。だが…」

「だが？」

「お前が産まれた」

「？」

「お前の容量はテラなどとうに超越していた、それこそエクサやゼタも越えるほどに」

「なにそれこわい」

「……続けるぞ。それでだな容量がこのままではパンクしてしまう。ならばどうするか、……1番割を食うデータを消すしかない。だからお前はここに移された。お前は神しんよりの人間じんごうだったからな」

「へー、なるへそね。ようするに、俺 爆誕

やべえこいつスゲー重え（データのな意味で）

どうする？こいついたら世界終わっちゃうよ？

じゃあ弾き出せば良くな？

今ここ。　　というわけか」

「ああ、赤ん坊のときはまだ良かったんだが…成長するにつれて限界がきてな…お前が理不尽な目にあっていたのもそのせいだ、世界がどうにかお前を消そうとしていた、…なぜ生き残っていたのか不思議だよ…」

青年　SIDE

ふむふむ、要するに俺スゲー、ということね。

まああの世界に未練なんかないしな。別にどうってことねえけど。大切と思える人も1人もいなかったし。

あれ？でも俺ここに来たはいいけど…何しやいいんだ？一応まだ未成年だしなんもすることなくね？

はっ！？もしかしてニートか！？ニートになれるのか！？それだったら俺はとっても嬉しいぞ。

寝て、食って、遊んで、また寝る。

……何という楽園……。

「おい神様、ここに連れてこられたはいいが俺は何しやいいんだ？
夢のニート生活ができるのか？」

「馬鹿かお前は…お前はもう神いじつよりの人間だと言っただろう。お前は言うなればカミサマだ。もちろん寿命の概念は無いし老けることもない、殺されれば死ぬがな、……お前はまだ未熟だからな、修行してから違う世界にでも行ってこい」

ジーザス…神は死んだ…あ、俺の目の前にいるや。

ん？修行してから違う世界に行く？

………どうということだ？

「まああれだ、神様に近いカミサマになったとはいえ今のお前は只のパンピーだ。刺されれば死ぬし潰れても死ぬ。経験も足りないからな、修行なりなんなりして戦争がある世界にでも行って来い」

「なんでだよ！カミサマってそんなにデンジャラスなことしなきゃならんのか！？あれか！？神様同士の喧嘩でもあんのか？」

「いや、神同士の戦闘はあまりないのだがな…神が悪ふざけで殺した者に力を与えて違う世界に、マンガなどの世界に送るやつがいてな、転生者というやつだ。…好き勝手やりすぎて物語がめちゃくちゃになるのだよ。お前にはそれを防いだりしてほしいんだ」

なんじゃそりゃ？っていうかマンガの世界ってあったんだなあ…まあもしもの数だけ世界は存在しているっていうしな。無いことないんだろう。

「力ってどんなのが与えられるんだ？そいつらには」

「私はそんなわざと人間を殺して楽しむような下衆な行為はしたことがないからよくわからんが…たしか『王の財宝』？とか『…』の魔力100倍』とかを与えたりしたとか言っていたな、よくわからんが。まあその神は下衆な行為をした罪で「滅」したが」

いや無理ゲーだろ。勝てねえよ。指先1つでダウンさせられるわそんなもん。いや、俺にもそういうのがもらえるのか？それだったらまだ……

「やらんぞ」

「うおい！死ぬって！間違いない！くれよ！」

「はあ……お前なにか勘違いしてないか？」

「は？」

「さっき言っただろう、お前の容量は馬鹿でかいと」

「あ、ああ。それがどうかしたのか？」

「他の人間の容量は小さいからな、強くなるにしてもたかがしれている。お前がそんなもん持っていてても宝の持ち腐れ、邪魔になるだけだ。そうだな……10年、10年だな、それだけ真面目に修行し

ていたら転生者なんぞ雑魚に感じるようになる。指先1つでダウンさせるようになるぞ。1000年で私にも並ぶだろうな」

おう……まじすか。ん？でも……

「あんたはそんなに強えのか？」

「あたりまえだろう。これでも最高神だからな、私からしたら皆ドングリの背比べだ。なに、すぐにお前も私くらいのレベルにまで上げてやるう、いい暇つぶしにもなるしな」

は？………最高神？

「お前ってそんなに偉かったのか…つうか俺もそこまで強くなれるのか？実感がわかねえんだが」

「私が最高神だと知ってもお前は態度を改めないのだな…」

「それが俺クオリティ」

「ふふっ、まあいい、お前がおもしろいやつだということは十分わかったからな」

褒められてるん………だよな？

「さあ！そうと決まればさっそくやるぞ！とりあえず目標は下級神だ！転生者なんぞ通過点だからな！みっちりシゴいてやるう！なに、転生者の数はそんなにいないし平和に暮らそうとしている者のほうが多いからな、質の悪い奴は極少数だ、観光気分で行ってこい。恋人でもつくったらどうだ？」

「おい！待ってって！大事なことを忘れてるぞ！」

「む、大事なこととはなんだ」

「自己紹介だよ自己紹介、いつまでもお前だったりあんたって呼ぶわけにはいかんだろう？俺もできるなら名前で呼んでもらいたいしな。まあ神様だったら知っているとは思うが」

「おお！すっかり忘れていたな！私と同格の者が来て少々舞い上がっていたようだ、わたしの名はルーだ、よろしく頼む！」

「ルー、ルーだなわかった、俺は……天月、天月早紀だ、よろしくな。女みたいな名前とか言わないように」

……こうして俺の『物語』が始まったのであった……

『カミサマ物語』第1話 完

第1話 神様って幼女か爺のどっちかだと思ってたよ(後書き)

がんばったぞー

第2話 キングクリムゾンって便利だよ

SIDE 早紀

どうも、早紀君です。修行という名のいじめを行ってから早1000年。それなりに強くなりました。

ワァーパチパチ

……何だって？飛ばしすぎ？いいじゃないか、めんどくさいんだもの。

君達は器が大きいと早紀君は信じてるよ。

まあ回想はしてみよう。折角だからな。では、ダイジェストでどうぞ。

く回想く

「よし！！早速修行開始だ！！」

「せんせー、なにするんですかー」

「とりあえず私が攻撃するから避ける。えくと…何だっけ…あ、あれだ、『マスタースパーク』」

「えっ！？おい、ちよ待てて」

「いや正直すまんかった」
「ぶち殺すぞ」
「ユーマン」

.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....

＼ンーユチピノ

「避けれるか馬鹿。何弾幕張ってんだ馬鹿。残機3残ってなかったら死んでたわ馬鹿」

「（いや、残機がある時点でおかしいのだが……）」

「せんせー、最近の若者はキレやすいんですよー」

「い、いや。次からはちゃんとやるから大丈夫だ、うん」

10年後

「だ、か、らあ！！少しは手加減しやがれ！！なあにが『燕返しッ！』（キリッ）だ、ふざけんなよマジで！！一度に何百回と来る斬撃を避けれるかあ！！」

「何を言う、なんだかんだでついて来れているではないか。大丈夫な証拠だ。さて、次は何にしようか……」

「楽しんでんじゃねえ！！」

100年後

「かめはめ……波アアアアツツ!!」

「うおっ!危ないではないか!」

「撃てた…健全な男の子ならば必ずやるであろう黒歴史の1つ…:かめはめ波を…:感動…」

「むう……ならば私は…元 氣 玉アアアアツツ!!」

「切り札をそんなに簡単に使ってんじゃねえ!!」

500年後

「ん？ルー、なにやってんだ？」

「なに、暇なのでなんか面白そうな技ないかなあと思いついてネットに入り浸っておるのだ」

「こら！そんなことやってないで勉強しなさい！それか外に出て遊びなさい！！だから友達もできないのよ！？隣の家のタカシ君を見習いなさい！」

「おいおい母さんこんな格言を知らないのかい？『他所は他所、家は家』それに外に出ないと友達ができない時代はもう終わったんだ、ほら、私にはこんなにも共に動画に弾幕を打ち合う仲間たちがいる…」

「駄目だこいつ…早くなんとかしないと…」

900年後

「ストナアアア！！サアアアン！！シャアアアアイインツツ！！」

「カイザアアアア！！！！ノヴァツツ！！！！」

ドオオオーーーーンンン!!!!

「……………やりすぎちゃったな」

「うむ……………もう少し自重するべきだったな、やりすぎてしまった」

「ちなみに今どれくらいの威力だった？」

「私とお前の攻撃で……………うむ、少なくとも星1つは逝ってしまったな」

「怖ッッ!」

END 回想

あるえー？なんか……遊んでばっかだったなあ……。

いや、一応やることはやってたからなあ大丈夫だろう。自分の戦闘スタイルも確立したしな、いろんな便利な魔法的なものとかも教わったし。

人間の限界は超越したが。

というか時間の流れがよくわからなくなってきたんだよなあ……

不老って不思議。

閑話休題（1回は使ってみたいよね）

でもなあ…ルーの奴1000年もすれば私に並ぶとかいいながら全然追い付けてないんだよなあ…。

他の神様との小競り合いとかだったら問題無く勝てるようになったんだけどなあ…。

というか思いつきで修行の内容を変えすぎなんだよ！！なあにが「感謝の正拳突き10000本！！音をも置き去りにし、光をも超え、亜光速をもぶち破るのだ！！」だちくしょうめ。

人の都合を考えろ。俺は感謝することなぞあんまり、というか全く無いんだよ。

あれか、お前の独裁者っぷりに感謝しろってか。

しかも人が必死こいてる間にインターネットなんぞやりやがるし。

同じMADを何回も何回も何回もニヤニヤしながらみやがって。

貴様なんぞ実況プレイ動画でも見ながら白熱してる駄目人間め。

あつ人間じゃなくて神か。

この駄神め。

「むっ？さっきからずっと罵倒されている気がするのだが」

「そんなことはない、気にすんな」

「むう…釈然としない…」

ああ、神様だから心くらい読めないのかよ、とか思うかもしれないがそういう類のものは俺は自動的に防御^{レジスト}してしまうらしい。

あの某ドラゴンでクエスト的なRPGで流れる軽快な音楽を流しながらレベルアップしていったことは伊達ではない。

常時マホカント、リフレク状態であるといっても過言ではない。(精神的な意味でね)

さて、長々と考えていたがそろそろ行動に移ろうか。

「で、年月的には結構経ったしやることもやった。もう違う世界に行ってもいいのか?」

「そつだな、もういいだろう。準備をするので待っている」

了解つと。……………ん?そついえば…。

「その世界は俺が行っても大丈夫なのか?容量とかあるんだろ?」

俺が行った瞬間に世界がパンクでもしたらお話にもならない。多少の罪悪感を感じるようになってしまう。

「大丈夫だ、制限も掛けるし容量的にも問題ない。それに……お前は神性が欠片も見当たらないからな、1000年も生きておいてなぜ人間のままなのだ……」

そう、今ルーが言ったように神や長く生きた獣などは神性という一種の崇められ、力が増すという性質を持つようになる。

獣は神性を纏って神獣になるらしいし神性が大きければ大きいほど神の位も上がっていくらしい。中には長く生きたわけでもなく、他の神や神獣などを倒し、力を吸収するという奴もいるんだとか。

俺はあまり知らんが。

ちなみに俺の神性は一般人に毛が生えた程度なんだとか。

……なぜ増えない？

「根性が捻じ曲がっているからではないか？」

「お前にだけは言われたくねえ」

まあ別に無いとこまるようなモンでもないから構やしないんだが。ただ他の神っぽい奴らに舐められるのはむかついたなあ……。なんか死を司るとかいう中二病まっしぐらな神がきて馬鹿にされたのはむかついたからなあ。ほんとに。

しかも武器が鎌って……何処までテンプレを極めてんだよ。
まあすぐボコボコにしてついでに鎌も奪っておいたが。

泣いてたなあ……あいつ……。まあ喧嘩売ってくるほうが悪い。俺の機嫌が良かったらこんど返してあげよう。こんな振り回しづらいモノはいらん。

正直邪魔。

「ん？制限ってどれ位だ？」

「ん……3、4割？ん、悪いな、分からん。世界に入ってからじゃないとな、少々予想がつかん」

「解除とかってできるのか？」

「その気になればできる。あんまり長い時間はだめだけどな」

「ん、了解」

まあなんとかなるだろ。そのぶん自重せず暴れちゃおうかな

「駄目だぞ」

「ちっ
」

ケチめ。

「おしっ！準備できたぞ！さあ、行くのだ！」

「……………おい」

「なんだ？」

「穴ってどういうことだ」

そう、今俺の前にあるのは人が2人位入れるような穴。正直入りたくはない。

誰も好き好んで穴に落ちようとは思わないだろう。

「テンプレだろう？」

「こんなテンプレいらん、扉かなんかにしろ」

「ちっ、我が儘な奴め」

「普通だバカ」

よく考えればわかることだ。

「っつと見せかけて、うらあ！！」

「えっ、おい、てめっ！！」

「こいつ押しやがった！やばい落ちる落ちる落ちる！！」

「正直創りなおすのメンドイ、ということだ、いってらっしゃいだ」

「お前今度覚えてろよコルアアアツツ！！」

「とつか何処行くのか聞いてねえ！！心の準備とかあるだろうがちくしょー！！」

『カミサマ物語』 第2話 完

第3話 落ちた先には金髪幼女（前書き）

タイトルで内容がわかるといふ…

今さらですが名前のつけかたについてです。

主人公の名前 適当

神様ルの名前 ケルト神話かなんかでこんなんがいたはず…

みたいな感じですよ

第3話 落ちた先には金髪幼女

side 早紀

はいどうも、早紀君です。

今、絶賛、

落 下 中 だ っ せう。

いや、結構な高さだわコレ。たぶんこのまま落ちたら美味しそうな
ジャム状態になるんだろっとなあ…。

洒落にならないね、うん。まあ実際落ちても死にはしない。痛いけ
ど。

さて、ここで慌てず騒がず落ち着いて…っと、よしよし浮けた浮け
た。舞空術的なアレである。

なんか気とか魔力とかエネルギーは使っていない。浮きたいと思っ
たら浮けた、そんな感じで使っている。

ゆっくり降りましょう、人間急ぎすぎると良いことはありません。
足を踏み外さないとも限らないからね！………フラグか？

て！！

血鬼め！！

あん？なんか聞こえたか？まあいいや。よいしょっと。

「グハアツ！！」

あつやべえ！何か踏んだ！しかも感触的に生き物…しかも声がした
ということは人間！？
どうしましょう。

神は言っている…マツハで逃げると…

よし！逃げよう！道を間違えたと言っても言うんだ。そうだ、そうしょ

う。

謝れば許してくれるさ！

「すいません、道を間違「何だ貴様は！！我らの邪魔をするとは！まさか！貴様も吸血鬼の仲間か！！」話を聞こうぜボーイ……」

ん？吸血鬼？なんか物語のキーマンっぽい響きだな……気のせいかい？いいや、無視だ。面倒ごとはスルーの方向だ。
金髪の幼女がこつちを睨んでいるがスルーだ。

「いえ！！とんでもない！僕は関係ないですよ？飛んでいるときに力が出なくなりまして……落ちてしまったのですよ」

名演技だとは思わないかい？諸君。

「なんだと？…魔力切れでも起こしたのか？…ふん、確かに魔力がないな。飛べなくなるのも事実か。まあいい関係がないならどけ、貴様など邪魔なだけだ」

キタアアアアア！！話せばわかるね！言い方が超ムカついたけど我慢さあ！！大丈夫！俺は忍耐力がある大人！！……それに大事なこともわかった。

あのモブAは確かに『魔力切れ』と言った。ということはこの世界には魔力などの概念がある、ようは争いがあるような世界だということだ。念のために隠しておいて良かったな。

流石俺。頭が良い。

「そついえば吸血鬼ってどいつですか？記念にちょっと見てみたいんですけど」

「うるさいぞ貴様！！それに危険だ！関係のない奴は去れ！！」

「大丈夫ですよ。それに貴方達は凄く強そうですし吸血鬼なんぞ一捻りなんでしょう？」

「ふ、ふむ。わかっているではないか。吸血鬼はあいつだ」

こいつ扱いやすいなあ……。モブBもモブCも照れてんじゃねえよ。んで吸血鬼はどれだ？ムチムチのおねーさんとかだったら助けようかな……

……………あ？

「すみません…あの幼女が…」

「我々正義に対する悪！吸血鬼だ！」

はあ？あの幼女モブの娘とかじゃなかったのか？家出幼女を追う親的なものではなかったのか？

誰が幼女だ！！とか叫んでいるが無視だ。

「ちなみに捕まえたらどうするんですか？」

「貴様は頭がおかしいのか？吸血鬼だぞ？殺すに決まっているだろう。いや……我らの慰め者にしてから殺すのもありだな。クツクツク…我らは正義だからな！我らの行う行為は正しいに決まっている！！！」

うわぁ…こんなに恥ずかしいことを堂々と言えるなんて逆にすごいな。

いい大人が正義とかなんとか…羞恥心は存在してないのか？しかもロリコンか？救いようがねえな。

……………ふむ。

「おい！幼女！助けてほしいか！」

「貴様はさつきから急にやって来てから幼女幼女と…ふざけているのか！！助けなどいらん！！！」

ふむ。実力的には幼女のほうが数十倍も実力は上。だが攻撃を受けて疲労中ってとこかな。

クソッ！何故幼女なんだ。そこはおねーさんにしとけよ。

『助けてくださってありがとうございます…』

『いえ、当然のことをしたまですよ。美女は放っておけない性質でして（キリッ）』

『まあ…素敵なお方…。あのお礼と言ってはなんですが…私なんてどうですか？』

『それは“そういう意味”と捉えてもいいんですか？』

『……………はい』

『そうですか、ではそのお礼、喜んで頂きますね』

『キヤッ！……あ、あの、私初めてなので……優しくしてください……ね？』

『はい、まかせてください。気持ちよくしてあげますよ……』

『ああ………あん………ああ！！イイ！！自分で慰めるのと全然違う！！』

『まだまだ気持ちよくしてあげますよ……本番はこれからです……』

みたいなことを考えていたというのに！！俺の気持ちを弄びやがって！！

「何を言っているんだ貴様は！！やはり吸血鬼の仲間か！！」

「待て待て、まだ助けようとしてない」

「しらばっくれるな！闇夜切り裂く一条の光、我が手に宿りて敵を食らえ！』白き雷』……」

うおおう！なんかビリビリしてそうなのがこっち来てる！！とりあえず………回避い………

「あぶねえじゃねえかバカヤロー！！殺す気がコラア！！」

「ふん！本性を現したか吸血鬼の仲間め！！貴様らは悪なのだから殺すに決まってるだろう！！」

「悪悪言ってるけどお前らのほうが絶対悪だからね、幼女追い掛け回している時点で青い服着た国家公務員に捕まるレベルだからね。しかも傷害罪も加わるからね」

「な！我が悪だと！もう許さんぞ貴様！来れ雷精、風の精！！雷を纏いて吹きすさべ南洋の嵐、『雷の暴風』！！」

またなんか来たし。俺なんもやってなくな？あれ？すごいイライラしてきたぞ？もう反撃していいよね？

「つーかさつきから鬱陶しいんだよお！！バリバリバリうるせえのは思春期の暴走族くらいで充分なんだよ！！…うらあ！！」

こんなもんルーの悪ノリした攻撃に比べたら屁みたいなもんだ。よって……

「殴り返す！！」

「な、なんだと！！う、うわあああ！！」

汚え花火だ…（弾けてはいません）

「ったくよー、いきなり喧嘩売らないでほしいね、こっちは平和的に終わろうとしたのによー」

「おい」

「エンカウントしたら即戦闘とかねーよ。チュートリアルはさめよ。最近のゆるゲーマー舐めてんじゃねーよ」

「……おい…」

「ましてやなんで最初からライデイン使ってくるんだよ。一番最初の敵はスライムだろうが。ひのきのぼうで倒せる敵つれてこいや」

「……………おい!」

「でもどうせだったらぶちスライムのぼうがいいな、あれだったらいけ」
「おいと言っているだろう貴様! 話を聞け!」
「あれ、幼女よ、まだ居たのか」

まったく気付かなかったぜ。

「さっきから呼んでいるのに無視しおって……………舐めているのか!」

「ごめん、素で忘れてた」

side 幼女

「ごめん、素で忘れてた」

なんなのだこいつは! 追われていたところに急に現れたと思っていたら……

最初は敵の増援だと思っていたのだが、何が助けてほしいか、だ
！！私を誰だと思っっているんだ！！

『闇の福音』エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルだぞ！！何が忘れていただ！！

だが今はそれよりも…

「なぜ私を助けた」

吸血鬼である私を追う奴は数多くいたが救おうとした奴は1人としていなかったからな…こいつは何故私を助けたのだ？

「あー…流れで」

「流れとはなんだ！！流れとは！！」

こ、こいつ…やはり舐めているな！？

「お前はあの魔法をどうやって跳ね返した！それも魔力による肉体強化も何も無しでだ！」

これは私が最も聞きたかったこと。魔力による強化で魔法を避ける、

打ち消すなどなら普通にあることだからわかるが…さっきのはどう
考えても生身で魔法を打ち返した…
どういうことだ…

「殴ったらいけた」

「理由になっていないだろうが…！」

「適当か…！」

「しかしやかましい幼女だな、カルシウムとれ、カルシウム。助け
てもらったんだからありがとございまして終わっとけよ」

「誰のせいでこんなに騒いでると思っているのだ…！」

side エヴァンジェリン END

さて、これからどうしようかね。まわりは殺風景だしね。

町とかないかなあ…探してみるか。

『カミサマ物語』 第3話 完

第3話 落ちた先には金髪幼女（後書き）

感想をくれてもいいのよ？— ……（チラリ）

第4話 幼女に物事を教わる…なんかやだな（前書き）

話が進まないZE

第4話 幼女に物事を教わる…なんかやだな

side 早紀

さて、これからどうするべ。と思って歩いているのだが……

「幼女よ、何故着いてくる」

「だから私は幼女ではない!!」『闇の福音』エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルだ!!」

なんですかその中二な二つ名は、闇ってなんだよ闇って。

「わかったわかった、エヴァンゲリオン・A・K・マクドナルドな、うん、覚えたぞ」

「違うわ!!」『A・K』しか合っていないではないか!!」

あゝもうやかましいなあ…何でもいいじゃないか。

「よくない!!」

心読むなし。

「で？本当になんて着いてきてんだ？なんか目的でもあるんだろう？」

家なき子ではありそうだが吸血鬼ということではやはり長く生きていくらしい。なにか考えがあるのだろう。なんだかんだでこの幼女結構強そうだ。さっきも助けなくても普通になんとかできただろう。

「貴様の魔法の打ち消し方はどう考えても異常だ。それをより近くで見れば理由がわかるはずだ。私は今でも充分強いが力をつけるに越したことはない、だから貴様はその手品のタネを教える」

偉そうに言うねえ。手品でも何でもないんだがなあ…、あんなん身体を強化しなくても余裕で消せる。直撃しても痛くも痒くもならない。

「やだね、身体を鍛える幼女よ。あんな指一本で消せるようになるまでな」

「そんなことできるわけが無いだろう！……もういい。最後通告だ、素直に私に魔法を打ち消したタネを教えるか、……死か。どち

らか選べ。私をコケにしたことは聞かなかったことにしてやるっ」

「はあ？なに言ってるんのこの幼女。確かにこの幼女は強そうだが……ルールに鍛えてもらった俺からしたら有象無象レベルだぞ？制限掛かってる今の俺でもまったたく苦戦しないくらい。力の差ぐらいわかんと思っただが……」

「なに？俺って弱く見えるわけ？」

「まあ弱く見られるのは全然構わない。相手が俺を下に見て侮ってくればそのぶん色々楽になるし。」

「ふん、魔力が欠片も無い奴が強くみえるわけがないだろう。それに足運び、構え、気配の察知能力から考えても只の素人だ」

「あー……、そっぴや抑えてたねそっぴやの。足運びと構えはわざとだが……」

「気配の察知能力？……ああ。この幼女何回か俺のこと殺そうとしやがったな。結局未遂で終わったが。あれは俺を試そうとしたのか、多分来たら反射的に殺っちゃってただろうな。さすがに幼女を殺すのは嫌だ。」

「あんまりちよっかいかけたくなかったんだがなあ……ま、ちよっか痛い目に合っってもらっかね。」

俺は体の力を全て抜き、脱力した形で一瞬で少女の後ろへ回り込み爪を少女の首に当てた形で停止した。

「はい、一回死んだ」

「な！！なんだと！！（この私が全く見えないだと！？）」

こんくらい初歩の初歩だ。相手に気付かれることなく瞬時に殺す暗殺者紛いのやりかた。これは真つ先に覚えた。ん？なぜかつて？楽じゃないか、すぐ死んでくれると。

まあこれの進化版の技も何個あるんだが…それはおいおいと言うことで。

「まあ…力の差はわかったかね？吸血鬼と言うことは不老不死か？うん…まあ殺せないことはないから殺ってもいいんだが…めんどいから負けを認めてくれると俺は嬉しい」

「……………もし、もし抵抗したら私はどうなる」

「うっくん…そうさなあ…めんどくさいし、人に恩も感じないような馬鹿だったってことで動けないようにしてどっかの教会にでも置いてってやるよ、まあ十字架に架けられて火で炙られたりするんじゃない？経験済みかもしれんが、もう一回炙られて来い」

「…悪かった、だから許せ」

「あくん？なんだってえ？」

困ったなあ。爪が勝手に幼女の首に刺さっていくぞ？

「ぐっ！私が悪かった！だから許してくれ！」

「ゆるしよ」

最初からそう言えばいいのに。全く、仕方の無い幼女だ。

「……くっ！貴様絶対に良い死に方しないぞ」

「奇遇だねえ、俺もそう思っていたところだ」

俺は死なんがな。俺に敵意を持ったやつは消滅させてやる。死ぬく
らいだっいたら土下座してでも生き延びてやる。そして俺は自分の女
と有意義に暮らすのだ。

「んじゃあ可哀相だからタネ明しだ。魔法を打ち消したのはマジで
殴っただけだ。あんな貧弱な攻撃が俺に通るわけないだろう。んで
魔力の件についてだが隠しているだけだ、自分がどのくらいの量を
持っているかわからんからな、オーケー？」

なんかあり得ないって顔してんな。

「……もう一つだけいいか」

「うん？なんだ？言ってみ」

欲張りな奴め。

「貴様はその力をどうやって手に入れた」

そんなの

「鍛えたからに決まってるじゃん」

「だから！貴様は只の人間だろう！しかもまだ若い、いつ鍛えたというのだ。10年やそこらであんなことはできないだろう」

「うん、10年じゃ無理だな。だから1000年も鍛えたんだ」

「だろう！10年やそこらで………は？」

「どうした」

そんな鳩が豆鉄砲くらったような顔して。

「い、いまなんと言ったのだ」

「1000年鍛えた」

「なんだと！？貴様不老不死か！？」

「うんにゃ、不老だけだ。死にはする、お前が何年生きてるか知らんが人生の先輩だぞ？敬え、崇めよ」

「なるほど…勝てんわけだ…」

やっと敵意がなくなったな。いや、これは……諦めに近いものだな。

「じゃ、そついで」

もう俺は寝たいのだ。町を探しに行く

「ま、まてー！」

「んだよ」

また喧嘩売ってきたら今度こそ殺す。慈悲など無い。

「わ、私も着いていっていいか」

「おう、いいぞ」

「いや、そんなこと言わずに……………つて、え？」

「ちょうどよかった、俺道わかんねんだよ。あと色々聞きたいこともあるしな、ほれ、行くぞ」

魔法とか魔法とか魔法とか、この世界の攻撃手段を覚えたら特に目立たなくなるからな。郷に入っては郷に従えってやつだ

「い、いや。拒否したりしないのか？私はお前を殺そうとしたのだぞ？」

「大丈夫、お前程度じゃどう足掻いても俺には勝てない」

「いやまあ……………たぶんそうだが……………」

「ほれ、さっさと行くぞ、俺はもう寝たい」

第4話 幼女に物事を教わる…なんかやだな（後書き）

主人公についての捕捉

早紀はけっしてフェミニストというわけではありません。

老若男女問わず平等に接し、平等に殺ります。

早紀は1000年生きているとはいえまだ人間です。決して殺しに耐性が付いているわけではないですし、快樂殺人者ではありません。

ただ1000年も人付きあいがなかったので少し壊れています。

あいつがうざい

よし、殺そう

となるくらいには短絡的な思考をしています。

この思考回路は人と接することによって多少は治ります。殺さずに半殺しレベルに抑えるとか。

人は1人では生きていけません。ルールがいたとはいえ、友人と呼べる存在があまりにも少なすぎるためです。

文中で美女との情事を想像していたのも繋がりを得たいという裏返しです。

カミサマになる前も繋がりには存在していませんでした。

なので繋がりを得たら結構大事にするでしょう。
裏切られたら即殺ですが。

………というのが裏設定。これは最初から考えていた設定。

この話は基本コメディなので繋がりがどうとかはどうなるか未定（笑）

カミサマになる前の早紀を書いたらなかなかのシリアスになってしまっ……

……無理っすね（笑）

作者にシリアスは向いていない。

長々とすいません。彼は決しているいい奴ではないと言いたかっただけです。

………キャラ設定でも書くかな。

第5話 これが転生者…ねえ…鬱陶しいなあ（前書き）

今回は魔法回と転生者との邂逅。

わりとあっさり転生者はやられますが気にしないでください。

第5話 これが転生者…ねえ…鬱陶しいなあ

side 早紀

さて、今俺は何をしているかというところ……

「アールデスカット火よ灯れオオツ!!」

「だから強引にやっても無理だと言っておろつがあ!!」

魔法を習っています。

なにこれ、全然できない。詠唱を覚えるとかまじで無理。

なんで？エヴァによると魔力だけはアホほどあるらしいのに。

「早紀は魔力コントロールが下手すぎるのだ。身体能力が人外でも繊細な作業ができていない」

なんでかなあ、もしかして精霊とやたらに嫌われてんのか？

……………あり得るな。

「アールデスカット火よ灯れオオツ!!」

「話を聞け!!」

出るよおらぁ!! 出ないと世界壊すぞ!!

「早紀はどういうイメージで魔法を使おうとしているのだ?」

それは……

「ギョツと集めてドカンとする感じ」

「そんなんでできるか!!」

怒られちった……

「駄目だ、繊細な魔法は俺には無理、ということで大技を教えようか」

「初心者用の魔法もできんのに大技ができるわけなからう……」

なんだと。やってみなきゃわからないじゃないか。

「確か詠唱が覚えられないんだっただな……」

「うん、無理。なんであんなクソ長いの？一言で発動するようにしとけよ」

「いや、それは無理だが…そうだな、大技となると『千の雷』『燃える天空』私も使っている『こおるせかい』『おわるせかい』などだな、ただしこれらを使うには『えいえんのひょうが』という魔法を覚えねば使えんが、他の魔法も熟練者が使う魔法だ。そう簡単には……」

「燃えるおツ！！天空！！」

ゴオオオオオオ！！！！

「出たぜ」

「……色々言いたいことがあるがまず言っておくのは………何故初心者用の魔法が使えないのに広範囲焚焼殲滅魔法が一発で使えるのだ！！おかしいだろう！！しかも詠唱無し、ラテン語ですらないしな！！そんな抽象的なやり方で魔法を使うやつは初めてみたわ！！」

ほらみる、やはり俺にはこういう大雑把な魔法が向いてるんだよ。精霊が俺を嫌うってんなら強制的に従わせるまでだ。一言で充分だ、一言で。

「うし、もう魔法飽きた。よって本日の授業は終了、寝る」

「あつ、おい！お前から教えを求めたからわざわざ私が教えてやったというのになんなのだもっ…」

なんかエヴァがブツブツ言ってるが知らん。魔法もそれっぽい撃てたからもっいいや。

……ん？

「おい早紀」

「わかってる、なんか近付いてきてんな……そこそこの魔力…敵か？」

「わからんが…私を討伐に来るのだったらもっと大勢で来るはず…」

そっぴや吸血鬼だからこいつ追われてんのか、忘れてたよ。

「さて、なにが来るかな？なんの用もない魔法使いだったら無視。敵だったら俺の眠りを妨げたから即殺決定なんだが」

……
……
……
……
……
……
……
……
……
……

…
…

「おい、お前！！俺のエヴァたんから離れる！！」

「うわぁ…色々とうわぁ…」

「な、なんだ貴様は！！」

なんか来たよ…こいつ頭とか大丈夫なのかなあ。顔は…まあイケメンだな。ただ俺の鍛えられた観察眼がイケメン（真）ではなくイケメン（偽）と伝えている。何かが違うんだよ。

「なに？お前誰かの所有物だったの？じゃあ俺絶賛誘拐中？やべーよ、犯罪じゃん。勘弁してくれよ」

「そんなわけなからう！！あんなやつ見たことも聞いたこともないわ！！」

「待っててねエヴァたん！！今そいつから助けてあげるからね！！」

なんだよもう…まあいいや、あいつは敵。ということとは？

「眠りを妨げたから死刑決定、異論は認めません。おいエヴァ！こいつ本当に知り合いじゃないよな！殺っちゃっていいよな！？」

「だから言っているだろう！！そんなやつは知らん！！」

「俺のエヴァたん喋ってんじゃねえ！契約により我に従え高殿の
ラニギケネーテート・アヒゲケネーチキウネ・ホス・テイマケチヌム・エクステンキルケネーネクススタント カブテント・オフイエ
王来れ巨神を滅ぼす燃ゆる立つ遠隔補助 魔法陣展開！ 第一から
クタ・アブリムム・アド・デキムズレア・コンステックントウス・セー・フレマダ、プレッスラム・クリテスオトシタキス・
第十 目標捕捉！範囲固定！域内精霊圧力臨界まで加圧！百重千重
カイ キキリアキス アストラ プサト キリブル・アストラベ
と 重なりて 走れよ 稲妻！！ 『千の雷！！』」

長い詠唱お疲れ様でした。でもねえ…

「聞かないんだよ、そんなん」

迫り来る雷の雨を避けることもせずただ手で払う。それだけで魔法は掻き消される。

「な、なんだと！！俺の全力だぞ！？まさか…能力があるのか！？
クソツただ魔力がデカイだけだと思っていたのに！」

「よし、もういい。死ね」

飽きた。手前ごときの攻撃なんぞ効かねえ。

「ちよっ！待って！お前も転生者だろう！？同じ同郷のよしみで許
してくれよ！悪かったってば！！俺のハーレムのおこぼれもやるか
ら！！」

やっぱり転生者か。たぶんそうだろうなとは思ってたけど。ああそ
ういや聞きたいことがあるんだつた。

「こいつでどういう世界なんだ？それを答えたら考えてやる」

「へっ？え、えっと『ネギま』を知らないのか？」

『ネギま』か、あ〜〜……………何だったかなあ…思い出せねえ。
どっかで聞いたことはあるんだよね。
まあ知らなくてもどうにでもなるよな。

「うんわかった、もういい。じゃあこれから俺がいう言葉を呟いて
いけ。そしたら助けてやる」

「おい、そいつを生かすのか！？また襲ってくるかもしれんのだぞ
！！」

「あ、ああ！わかった！（クククツ馬鹿な奴だ。助かった瞬間にこ
つちからやってやる）」

「じゃ、言うぞー。」
『どっか』

「ど、どっか」

「『私を』」

「わ、私を？」

「『殺してください』」

「殺して……え？」

「どうした？言わないのか？言わないと死ぬんだぞ？」

さて、どうするかな？

「い、いや、でも「殺すぞ？」ッッ！こゝ、殺してください！！」

ブシューウウー！！……ストーン。

「……あ」

「よかったな、願いが叶ったじゃねえか」

手刀で首を刈り、その首が地面に落ちる。

まあ敵対した時点でこいつに生きるという選択肢など存在しない。転生者だったし殺しても大丈夫だろう。なにがおこぼれた、偽の顔でいい気になってんじゃねえよ。

「……お前は本当に容赦がないな」

「容赦？なにそれおいしいの？」

「…ハア。まあいい、その死体、どうにかしろよ」

「オーケー。燃えるおツ！！天空！！！」

ゴオオオオオオオ！！！！

「死体一体を燃やすのに殲滅魔法を使うな！！！」

いや、これが俗に言うアルティメット火葬というものでな？

「馬鹿か！！！」

怒られちった…

『カミサマ物語』 第5話 完

第5話 これが転生者…ねえ…鬱陶しいなあ（後書き）

今回は転生者SIDEと6話を投稿します。

魔法の詠唱が疲れる…

多分次からは省略します

今回のネタはわかる人にはわかる…はず…

文才が欲しいなあ…

感想も欲しい…

誤字、脱字、アドバイスなどがありましたらぜひご報告をください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6868z/>

～カミサマ物語～

2011年12月27日00時54分発行